三陸ボランティアツァー2015

期間　２０１５年１０月 ２３日～２７日

参加者　９名(稲本、竹山、丸山、岡本、山下、西、武藤、池田、今井)

１０月２３日苫小牧港発　フェリー泊　船中にてミーティングを行う。

１０月２４日仙台港着　一気仙沼市大島を目指す。途中、JR 大谷海岸駅跡にて昼食。駅舎は無く道の駅になり、

海岸はフレコンバックが山積みされていた。未だ本格的に工事には入っていないようだ。昼食後気仙沼市街に向かうがひどい渋滞であった。工事車両のダンプの数が半端ではない。予定のフェリーに間に合わなかったが、その分復興商店街や港の周りをゆっくり見ることが出来た。

↑閑散としている復興商店街

↑地盤のかさ上げをし始めていた

↑港では桟橋の再建をしていた

↑大島行のフェリー

↑目指す大島である

↑大島観光協会事務所

大島観光協会のガイド、村上まき子さんに再会する。二年前震災の語り部として震災の模様を語っていた方である。事務所で村上さんの話を伺い、その後村上さんらと近くの海岸清掃をする。....これは結構きつかった。

夕暮れとなり、宿泊する亀山荘に入り一休みの後、夕食。ご主人が震災後の最近の状況を語ってくれた。被災地の五年目を迎えた課題を聴く。綺麗事抜きに震災後の現実のお話であった。

１０月２５日

未明、亀山に登って日の出を見る。この山頂からの景観は中々素晴らしい。山頂付近の松は震災時の火災や松くい虫等の影響で枯れた木が伐採されていた。お蔭で二年前よりすこぶる見晴らしが良くなっていた。二三年後には橋が出来ることも有り、これから景勝地として再び脚光を浴び復活するものと思われる。

↑大島の南側　　↑唐桑半島を望む　　↑気仙沼市街を眺望

↑亀山荘の女将とご主人　　↑玄関前にてご夫妻と　　↑運転手の案内がとても良かった

↑気仙沼市街にも未だある倒壊建物　　↑芝を植えたグランドの子供達の様や大人の声援か心地よかった。

亀山荘を発ちフェリーで陸前高田市にある一本松に向かうが、途中、かつてボランティアで芝を植えたグラウンドを見に立寄った。グラウンドは二年前より野球場に整備され使われていた。ボランティアした人達は心なしか嬉しそうに見えた。

上三枚と下左一枚は一本松とその周辺の現況である。巨大なベルトコンベアは二年前には未だ無かったが既に所定の土砂を移動させたので取り壊し中であった。今となっては傍に有るこの一本松は場違いなところにあるようにも思える。下の真ん中の写真は宝来館で久保氏率いる四人の若者メンバー(三陸ひとつなぎ自然学校)と挨拶。右の写真は以前ボランティアで来た時、定植したハマナスでしっかり根付いていた。

ここ(釜石市鵜住居町　根浜海岸)のボランティアは黒松の自生した幼苗を育苗しようという作業である。未だ移植に耐えられなさそうな苗は、踏まないように目印をつける。移植できそうな幼苗は丁寧に掘り出し移植する作業だ。ただ並べられた道具を見て.... 少し心配だった。草取り用のホー等一体如何するのかなと...。これは人数分を有り合わせの道具でそろえたのだろうと解釈した。途中、地元の佐々木虎男氏が見えられ、津波が来た時の模様を語って頂いた。氏はこの場所で津波に巻き込まれるも九死に一生を得た人である。

↑作業を終えて記念撮影　　↑近くの神社に参拝する　　↑海抜 18mの高さ迄津波が来た

作業終了後、記念撮影をし、以前ボランティアで片付けをしたという富王姫神社に詣でた。凄い高さまで来たことを改めて知った。どさくさ紛れに古木を切ろうと云う輩がいるのか、はたまた復興工事で邪魔とされたのか「切れば.... 天罰が当たる」と戒めた板が回りの古木に沢山貼られていた。護る人がいるのが嬉しかった。

↑久保青年に熱弁する会長　　↑愛称ジョイさんも交え語らう　　↑松林の中の津波の記念碑(11/26)

その夜、我々は宝来館に泊まり、久保青年、ジョイさん(柏崎未来さん、岩手出身の彼女が道内の大学に居た時震災が起きた...そして.彼女は行動した)を呼んで会食する。自分が彼らの年齢の頃何を思い、行動していたか..... 悔いはないが彼らのように真摯ではなかった気がする。青年達に明日を感じた。

１０月２６日

↑左の道路は通行止め右が供用中　　↑「風の電話」　　↑風の電話 box の中

「風の電話」(個人の庭園で事前承諾必要)は洋風の庭に電話線が繋がっていない白い電話ボックスが置かれている。震災が無かったら....が現実に起きた.....心の電話をかけたい人が大勢いました。気が付けば今の時代は色々大切なことを捨て去ってしまっていた。「風の電話」はそんなことを教えてくれているのかも知れない。

↑大槌町の復興イメージ

↑大規模なかさ上げが造成中

↑大槌町役場庁舎は被災当時のまま

↑大槌町役場裏側

↑「未希の家」ご両親の家にて合掌

↑民宿「未希の家」(一部屋のみ)

民宿「未希の家」は南三陸の防災センターで避難を呼びかけ続けなくなった未希さんのご両親が命の大切さを伝えるために始めました。民宿といっても一部屋のみ。我々9名は泊まれず日中の訪問でお母さんからお話を聞かせて頂いた。

帰りのフェリーで反省会と次年度のこと諸々について議論する。何時も以上に喧々諤々とするも、そこは大人の世界、喧嘩にはならない。何分、この緩い会の最大公約数は、現地の空気を吸い、人と語らい、何がしかのボランティアをする位で、価値観や想いは各人各様である。今様で言う「多様性」というやつである。

2016年6月には三陸のボランティアツアーは丁度丸５年を迎える。それを区切りにしたいという人達いることもあり、バス仕立てのツアーを企画しようということになった。果たして人を集めうるか....我々の発信力が問われる。

２７日苫小牧港着　現地解散する。

余白ギャラリー> >>>何気ない朝日三枚.....日の出は極短時間に周りに多彩な色を見せる。一期一会の景色。

↑唐桑半島先端の眩しい光

↑宝来館の前浜で空のグラデーション

↑帰路の船上にて日は今日も昇る

(文責写真・今井)